

「世界靈魂 (Weltseele)」の系譜と ドイツ・ロマン派における受容について

能 木 敬 次

序

プラトン (Platon, B.C. 427-347) は『ティマイオス』の中で神の世界創造についてこう述べている。「神は滑らかで均質、そして中心からどの方向へも距離が等しく、材料となる諸物体が完結しているために、それ自身もまた全体性を備えて完結している一つの身体を創った。そして神は、その真ん中へ魂を置き、これを全体を貫いて引き伸ばし、さらに外側から身体の周囲を魂で覆い、円を描いて回転する宇宙をすえた。」¹⁾この魂は「宇宙 (κόσμος) の靈魂 (ψυχή)」であり、これは個物として人間各自にあまねく分与されているとプラトンは考える。ただし、「宇宙の靈魂」はその時点ではただ「理性、νοῦς」によって構成されているが、人間の魂にあっては、その身体的特性ゆえに理性の他に「激情 (怒り)、θυμός」と「欲望、ἐρως」を具有するとプラトンは言う²⁾。この人間の個々の魂をも包含し、これと相互に交流する「宇宙の靈魂」の思想は、後にプロティノス、ニコラウス・クザヌス、パラケルスス、ジョルダナーノ・ブルーノ、ヤーコブ・ベーメら新プラトン主義者たちによってそのつと新たな解釈を加えられながら継承されてきた。

プロティノス (Plotinos, 204-269) は古代ユダヤの神秘思想にある世界創造における神の意志の流出説の中にこの「宇宙の靈魂」(ἡ τοῦ παντός, 完全なる魂) を位置づけた。それによると、一者 (神) はその力の横溢から

自己自身の分身として「理性」（知性）を生み出す（流出の第一段階）。次に理性から「宇宙の靈魂」と人間の靈魂を含み持つ「靈魂」が流出する。「靈魂」は「理性」（知性界）と物質界（感性界）の橋渡しをする。そのようにして、「物質、ὕλη」の流出（第三段階）、「質料・素材」の流出（第四段階）を経て世界創造が行われる³⁾。宇宙は魂を持った一つの生き物（生命体）であり、人間の魂もまた感性界に流出した宇宙の魂の部分と考える。宇宙の魂と人間の魂は、知性界に居を占めている限り一つとなっている。この両者の一体性は知性界を出て感性界に向かっても、なお天界に位置を占めている限り維持されているが、宇宙の魂が天界に留まっているのに対してわれわれ人間の魂はさらに降下して地上界に到達する。魂は絶えず自己自身の中で生命活動を営むとともに、その生命活動を通して下位のものへの働きかけが行われる。そのようにして「宇宙の靈魂」は自己自身に対する観照を通して知性を観照し、知性から保有するロゴスに満たされることによって「宇宙の靈魂」としての完成の域に達する⁴⁾。

クザーヌス（Nicolaus Cusanus, 1400/1-1464）はキリスト教の三位一体の教理をアリストテレスの質料と形相のカテゴリーで説明する際、「世界靈魂」（anima mundi）の概念を用いた。すなわち、世界は「質料」と「形相」と「結合者」の三つの原理から成り立っているが、これらがそれぞれ「父」と「子」と「聖霊」を表す。質料は「限定されるべきもの」として父なる神の力の充溢を象徴する。形相は「限定するもの」であって、質料そのものに宿る原理として子なる神を表す。それは「世界精神」（spiritus mundi）とも言われる。第三の要素としての「結合者」とは質料と形相を結んで物を生成変化させる「運動」そのものを意味し愛の結合による生産になぞらえる。これは「世界靈魂」と呼ばれ、聖霊としての神を象徴する⁵⁾。

パラケルスス（Paracelsus, Theophrastus Bombatus von Hohenheim, 1493/94-1541）は「世界靈魂」と個人の靈魂が夢を媒介として交流するそのあり方を詳述した。彼によれば、宇宙世界は地上世界、諸遊星の球層から成る天上世界、そしてその上に「世界靈魂」の棲む靈的世界によって成り立つ。そして

このような「大宇宙」に「小宇宙」としての人間が対置される。同様の構図で「地上界」と「身体」、「天界」と「精気」、「霊界」と「魂」が対置され、各々の要素間の交感が行われる。例えば、人が眠っているとき、世界を支配する霊が人間の魂に働きかけて霊夢をみさせることがあり、逆に人間が魂においてあることを念じると「世界靈魂」がそれに応えて天界にある変化を起こすとしている⁶⁾。

それから半世紀後、青年時代をナポリの修道院で自己の思想を形成したブルーノ (Giordano Bruno, 1548-1600) はプロティノスの流出説に修正を加える。彼は一者と自然を同一のもののみなす。形相も質料も共に一者である宇宙の中に融合されている。その際、「世界靈魂」(anima del mondo) は質料と共に世界・宇宙の原理となる。つまり、宇宙は、「世界靈魂」と質料によって内から構成される。同時に「世界靈魂」は自己の最高の能力である普遍的知性を通じて宇宙を形成する。「世界靈魂」は宇宙・自然・世界に内在しつつ、同時にその起動因として働く。ここでは「世界靈魂」の役割が飛躍的に拡大されている⁷⁾。

同じ頃、教会の圧力による長い沈黙を破って、ベーメ (Jakob Böhme, 1575-1624) はパラケルススが錬金術の見地から、地上物質の四大元素 (火、空気、水、土) に魔術的な力を行使してすべての被造物を形づくる三つの根源要素 (硫黄、水銀、塩) に「世界靈魂」(Spiritus Mundi) の息吹を見て取る。彼もまたプロティノス以来の伝統に則って、「すべての外的被造物は (神の) 霊に従って「世界靈魂」から由来したとし、「世界靈魂」を霊的世界と物質世界の橋渡しのものと位置づけているが、さらに錬金術の見地から独自の解釈を付け加えている。つまり、「世界靈魂」は神のスキエンツ (知慾、Scientz) と渴望をもって物質世界に錬金術的な工程を経て霊的に関与するというものである。スキエンツとは世界創造にあたっての神の意志力を指し、七つの段階・形態を経て最終的には聖書に顕われる「言葉の力」と化して世界創造をなす。ベーメは錬金術の工程をより精神的な意味で受容し、「世界靈魂」と関連づけている⁸⁾。

プラトンははじめとする古代ギリシアの哲学者からパラケルススやベーメなどのルネサンス後期の思想家に至る「世界靈魂」思想の変遷は、ギリシアの宇宙論とユダヤ神秘主義の世界創造神話、及び錬金術思想、これら三つの要素によって構成されている。そこでは、宇宙は一貫して四大元素によって構成された理性を有するそれ自身で完結した統一体として理解されている。ユダヤ神秘主義はその上に世界靈魂と個人の靈魂との関係と差異、及び相互の交流を力動的に加筆する。「世界靈魂」の思想に錬金術が関与してくるのは近代からである。14世紀から15世紀にかけて北イタリアでは錬金術や新プラトン主義、占星術がさかんに研究されていた。しかし、錬金術の歴史そのものは紀元前のエジプトに遡るほど古い。錬金術師たちの自然観は「世界靈魂」の思想を補強するのに有力な手だてとなった。「宇宙は全であり、生きている。宇宙のすべての構成要素は魂と意図を持つ。」⁹⁾彼らの多くは常にそう考えてきた。天体はエネルギーの磁場を造り出し、人間はそれを受身で経験することも、創造的な目的のために積極的に利用することもできる、と彼らは考えた。しかし、当時の人々でさえ錬金術師を何か胡散くさい詐欺師のような者と見ていたように、彼らの思想形成の道は決して平坦なものではなく、ベーメやブルーノに対する教会権力による徹底した弾圧から見てとれるように、彼らの思想が歴史の表舞台に出ることは許されなかった。

1. ドイツ・ロマン派の「世界靈魂」

18世紀後半、イギリスで紡績機の改良に端を発して産業革命が始まり、前世紀の啓蒙主義時代に成された機械・電気・生理学・化学の分野での画期的な発見・発明を踏まえて近代産業がまさに勃興しつつあった時、一人の若い医者が「動物磁気」(Tiernagnetismus)という神経症対処法を携えてウィーン、そしてパリの社交界に登場した。彼の名はフランツ・アントン・メスマー (Franz Anton Mesmer, 1734-1815)、彼の新処方方はパリで大きな反響をまき起こした。「動物磁気」とは彼によると「宇宙に充満して、人間・地球・

天体を媒介し、また人と人との間をも媒介する媒体となる物理的流体」であり、「病気の原因は人体内にあるこの流体の分布が不均衡になることであり、逆に病気の回復はこの流体の均衡が回復した時に完了する。」¹⁰⁾

彼の治療行為は、病人の患部に手をかざし、その「動物磁気」によって流体の体内での分布に均衡を回復するといった手法であった。開業から2年後の1777年、彼の磁気療法はいかがわしい詐欺的行為だとして彼はウィーンの医学会から追放される。その後、彼はパリに移って開業する。ここで多くの人々の関心を引いて医師としての成功を勝ち得る。しかし、1784年、ウィーンの医学会が彼の治療法に下した同じ嫌疑でもってフランス政府から糾弾され、パリを去り、その後ドイツやスイスの諸地方を放浪し、歴史の表舞台からその姿を消してしまう。

メスマーが「動物磁気」を掲げて医療活動をしたのは10年程に過ぎないが、そのわずかな期間にヨーロッパの医学界に一種独特な楔を打ち込んだ。フランス及びドイツにおける彼の後継者たちは催眠術から心靈主義、さらには精神分析心理学へと連なる心理学の基礎を築いたのである。中でもピュイゼギュール侯爵 (Amand-Marie-Jacques de Chastenet, Marquis de Puységur, 1751-1825) とその二人の兄弟は「動物磁気」に特に熱心で、「動物磁気」に関した数多くの実験を手がけた¹¹⁾。その中で被験者は「動物磁気」と思われる作用を受けて睡眠状態に陥り、通常、人間が持つことのない特殊な能力、つまり、別の人格の提示、遠距離にある物体の透視、及び未来そして過去への予言能力を示したとされている。以来、フランス、ドイツ、イギリスでは医者・学者・文人たちの間で「磁気睡眠」(sommeil magnétique) のこういった特殊な効果に関心が集まった。シュティリンク (Johann Heinrich Jung [genannt Jung-Stilling], 1740-1817) やケルナー (Justinus Kerner, 1786-1862) など「磁気睡眠」の本格的な実験・研究に着手し、中でもケルナーの実験室にはゲレス (Johann Joseph Görres, 1776-1848) やバアダー (Franz Xavier von Baader, 1765-1841)、シューバート (Gotthilf Heinrich von Schubert, 1780-1860)、シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854) が出入りし、「磁気

睡眠」の実験に臨席したと報告されている¹²⁾。メスマーによる「動物磁気」の研究と実践、それは後にメスメリズム (Mesmerismus) と呼ばれたが、それは彼の後継者たちによっておよそ三つの方向性をもって進展していった。フランスでは「磁気催眠」の技術開発とそれによってもたらされる「磁気睡眠」によって被験者に現れる心霊的な特徴の解明に集中した。イギリス・アメリカではもっぱら降霊術に関心が集まり、それは特にアメリカでは興行という形で商業主義と結びついた。一方、ドイツでは哲学的な関心に、つまり宇宙と人間を媒介する磁気流体の正体の解明とその磁気流体が被験者もしくは患者に影響を及ぼすメカニズムの解明にあった。メスマー自身は磁気流体の存在を固く信じていた。「動物磁気」をとらえて「宇宙に充満して人間・地球・天体を相互に媒介する物理的流体」とする彼の主張はプロティノスの言う「世界靈魂」の近代的表出とみなすことが出来る。しかし、彼はその源泉を解明することも、経験的にその存在を証明する証拠を提出することもついには出来なかった。

一方、彼の後継者たち、シュティリンク、ケルナー、バアダー、クルーゲ、シェリング、シューバートは生の神秘を文字どおり宇宙規模でまとめあげ、あらゆる生命活動の合目的性を体現している単一の生命ある媒体（世界靈魂）をつきとめ、その関連を形而上学的に説明しようと努力した。ケルナーは透視能力を持つといわれる少女を実験台に遠隔透視の実験を重ねた。バアダーは「磁気睡眠」状態にある女性患者にみられる様々な症状を彼の宗教家であり、かつ医師の立場から観察している。彼は患者の覚醒の状態を「通常覚醒」(gemeines Wachen)、「善磁化覚醒」(gutes magnetisches Wachen)、「悪磁化覚醒」(böses magnetisches Wachen)の三つに分類した。患者はこれらの様態変化の中で声・身振り・容貌・気分などを昼夜を問わず激しく変化させるのが観察されている。特に「悪磁化覚醒」状態では悪魔が患者の口を借りてバアダーに語りかけ、悪態をついたと報告されている。その際、彼女は自分にとり憑いている悪魔の名前を13も挙げた。エクソシストさながらの体験である。この観察の中でバアダーは、患者が磁化状態にある時、時間的・空

間的な透視能力を顕示すると報告している¹³⁾。クルーゲは「磁気睡眠」の中で被験者が透視能力を開発してゆく過程を六段階（覚醒状態 [Wachsein]、半醒半酔状態 [Halbschlaf]、真性暗黒状態 [innere Dunkelheit]、真性明澄状態 [innere Klarheit]、自己内視状態 [Selbstbeschauung]、全面明澄状態 [allgemeine Klarheit]）にまとめて説明した¹⁴⁾。ドイツ・ロマン派の思想家たちに特徴的なことは、当時、新たな生理学上の知見として重要視されていた「太陽神経叢」(solar plexus) の存在とその機能を彼らが自己の思想を展開してゆく上で大前提としていることにあった。現在では「太陽神経叢」の存在は解剖学上否定されているが、それは当時、身体の心窩（みぞおち）の部分にあり、そこを中心に上半身の神経系統と下半身の神経系統が交差・交感しているものと見られていた。彼らはこの「太陽神経叢」こそが宇宙に遍在し、宇宙と人間を媒介する「磁気流体」に直接的に関与しているものと考えた。「太陽神経叢」は「磁気流体」の発信と受信をする人間個人の側の基地であるとし、「磁気睡眠」によって「太陽神経叢」に謂わばスイッチが入れられた時、被験者に時空を超越した予知能力が付与されるものと理解された。

哲学的な立場をより鮮明にしたシェリングとシュューバートは、カントの批判哲学やフィヒテの絶対自我哲学といった時代の哲学に依拠しながらも、「世界靈魂」を独自の力動論的哲学の中に体系的に組み入れようと努力した。近代科学主義の成果の上にプラトン・新プラトン主義以来の神秘主義的世界観の伝統を再構築することが彼らの最終目的であった。彼らの研究の中には、部分的には成功したと評価出来る例もあった。中でもシェリングの力動論的積極哲学、始原的には対極的性質を持った事物がフィヒテ哲学に見られる弁証法的な展開の中で究極的には同一の生成・発展を示して新たな、より高度な存在様式を獲得してゆくといった同一哲学は、1820年から1850年頃までの30年間、ドイツの哲学界で一世を風靡した。シュューバートは、当時、最先端の医学の知見をもとに、メスメリズムを唯物論的に解説して「世界靈魂」の思想へ繋げようと試みる。

2. シェリングの「世界靈魂」

シェリングの思想はフィヒテの絶対自我における主観と客観の相関構造を基盤とする。シェリングによれば、自然には根底で二つの相反する力が躍動している。第一の力としての「積極的原理」(positives Princ^{ママ}ip)と第二の力としての「消極的原理」(negatives Princ^{ママ}ip)である。世界の営みにおける具体的な表れとして、前者は光であり、覚醒であり、動物である。それらは「男性原理」によって支配されている。一方、後者は重力であり、闇であり、眠りであり、植物である。それらは「女性原理」によって支配されている。この自然の対立的二元構成は、統一と衝突の弁証法的発展の中で有機的な世界を体系へと形成する原理、つまり「世界靈魂」へと至る。この過程の中で生の美しい輝きをもたらされ、事物が現実の様態を得る¹⁵⁾。一者としての神は諸物の全体性の中にある。この全ての中の一者は物質のどの部分にあっても認識可能である。全てがこの一者の中で息づいている。それが直接的に存在を現し、全てが一者の中で認識することが出来れば出来るほど、一者はいたるところで生を開示し、一過性のもの中で永遠の花を咲かせる。「男性原理」と「女性原理」が一つとなる「聖なる紐帯」(das heilige Band、「世界靈魂」を指す)を我々は我々の生と重力が回帰し、光の世界に我々をゆだねる「眠り」(「女性原理」)と「目覚め」(「男性原理」)の交換の中で感じ取る。その際、「男性原理」と「女性原理」を結びつける「全能の連辞」(All-Copula)は「理性」(Vernunft)である¹⁶⁾。神としての一者、一者と現象世界を橋渡しする「世界靈魂」、世界を構成する二つの原理を人間の側で意味づける「理性」、プロティノスの思想を再度展開する道具は揃っている。

一方でシェリングは「動物磁気」と自己の思想との関連はあっさりとは否定し去る。「我々は磁気の原因を、あらゆる物体に継続的に働きかけ、あらゆる物体を貫き、その要素に対して様々な関係を持つものにだけ曖昧な働きを見せる普遍的な原因と見なす。」¹⁷⁾「我々は磁気を持つそういった曖昧な働きゆえに、磁気磁化された素材に示すような引力という「死んだ概念」(den

totden Begriff) を排斥する。それは疑いもなく継続的に新たに造り出され、発展せられ、一般化し、あらゆる物体に働きかけるが、反発の負の力のあるところにだけ特異な動きを生み出すことが出来る「磁気原理」の顕著な動きとはつじつまの合わない概念である。]¹⁸⁾「もし磁気力が絶対的に内的な力であれば、磁気と同様に鉄の引力もその素材に対して特定の関係を示さなければならない。そういったことは一切見受けられない。]¹⁹⁾近代科学の発展の上に新プラトン主義の伝統を移植することがシェリングの積極哲学の目標であったが、物理学研究から出発した彼は「磁気の力」(die magnetische Kraft)をあくまで物理学の範疇に留め置いている。そういったことから、「磁気睡眠」に際して被験者に生じるとされる様々な超自然的な能力の発現に対しては、彼はほとんど興味を抱いていなかったようである。

3. シューバートの「世界靈魂」

シューバートの「世界靈魂」思想は、アリストテレスの『靈魂論』(de Anima) から出発する。アリストテレスは生物一般に魂の存在を認めているが、その特徴は生物の生命活動に対する唯物論的・機能的な見方にある。つまり、魂の働きは、植物にあっては「栄養摂取能力」及び「生殖能力」として機能し、動物にあってはそれら二つの能力の上にさらに「運動能力」と「感覚・知覚能力」が加味される。それゆえ、動物にあっては四つの能力の総合が魂ということになる。最終段階として人間の魂が問題となるが、アリストテレスは前記四つの魂の機能の上に、さらに思考能力としての「理性」(νοῦς) を加味することによって人間の魂を完成させる²⁰⁾。シューバートは自己の「世界靈魂」論を展開するにあたってこれらの魂の諸機能と構成の理論を積極的に活用する。

生命体にはその組織全体と外部世界を繋ぎ、自己維持のために「栄養摂取能力」・「機能進展能力」としてその生命体に内在する力がある、と彼は考える。それはあらゆる生体組織内の小さな個物を全体へと結びつけ、相互にそ

の機能を補完しながら個物の全体的な共同作業へと導いてゆく。そういった力をシューバートは「内棲する魂」(inwohnende Seele)と呼ぶ。一方、個物一般を包摂し、その欠乏部分を補い、自然一般の営みのために個物を纏めてその中心で支配する媒体として働く力が宇宙には存在するとした。それをシューバートは「普遍的に包摂する魂」(die allgemeine umfassende Seele)、あるいは「世界靈魂」と呼ぶ²¹⁾。「内棲する魂」と「世界靈魂」との関係は彼は蜜蜂の統一的・調和的働きに喩える。個々の何千・何万という働き蜂はその毎日の活動を、つまり蜜の収集、棲家であるところの蜜蜂の構築、幼虫の世話や外敵の駆除といった一連の仕事を各々が各自の分限・役割に従って無意識に、継続的にかつ調和的・統一的に行っているが、それは目に見えない世界に存在する強力な力であるところの「世界靈魂」とそれによって導かれ、働く蜂に内在する個別の靈魂との関係を象徴的に表しているからである。そういった自然の本質的傾向を彼は「自然一般の営みと享受のために個物をまとめ、その中心で支配する[絆](das Band)」とも「守護天使たち(die hütenden Engel)」とも呼んでいる。シューバートにとって生ける者は全て同じ位相の下で捉えられており、人類と他の生物との違いはない。世界史の中で眼前に展開する大事件もそういった「世界靈魂」と個別靈魂との関連で読み取られる。フランス革命のように一民族の歴史が新たな展開を示す時、その民族の強力な動きを民族の形成力へと導くべく登場する才能ある一個人(ナポレオン)と彼に率いられて歴史的イベントを完成させる一般大衆との関係を「世界靈魂」のシェーマで見取るのは社会学的にも刺激的なテーマである。シューバートはまた渡り鳥の帰巢本能やスイス人やラップランド人に見られる郷愁のような顕著な傾向を挙げて、「世界靈魂」を「生物のあらゆる種に本能的に植えつけられた[密かな記憶](die dunkle Erinnerung)」とも呼んでいる²²⁾。

シューバートはまた、当時、めざましい発展を遂げつつあった神経学の知見とメスメリズムの融合を試みる。つまり、身体には頭部に脳神経系統(Gehirnsystem)が、胴体部には神経節系統(Gangliensystem)がその関係部

位を取り巻くように環状に拮がっている。脳神経系統と神経節系統は心窩（みぞおち）のあたりで交わる。神経の中には「神経流体」なるものが流れ、神経の働きに様々なシグナルを送る。脳神経系統は感受性・情感を掌り、特に人間においては自己意識として立ち上がる。神経節系統は認識・記憶能力とともに生殖・栄養摂取能力を掌る。それは、胃神経叢や心窩なあたりがそのような認識の器官となっているものと思われるからである²³⁾。通常、両者の働きは分離的である。「脳神経や脊髄神経部は優れた誘導子として単に脳髄に感覚を伝えるばかりではなく、脳髄からその各部位に意志を伝えるのであるが、神経節系統の神経はその意志に従うものではない。」²⁴⁾脊髄周辺で環状に拮がり、脳神経系統と神経節系統に間であって両者を遮断する形で位置する交感神経 (die sympathischen Nerven) が「その神経節系統の周囲をめぐりながら、この系統を正常状態なら脳系統から分離し自立させ、一方の生命活動が別の生命活動に対して間接的にのみ影響を及ぼすよう、そして、神経節系統の運動や動揺が正常な（そして覚醒的な）状態では脳髄まで到達しないよう、魂に感受されないよう、また内臓や脈管の機能に関しては魂にいかなる直接的な支配力も許さないようにさせる、半導体的作用を行う装置を形成している。」²⁵⁾しかし、睡眠・失神・仮死状態・栄養摂取行為・性行為にあっては脳神経系統と神経節系統を隔てる柵が取り除かれ、生命体は内的快感とより豊かな情感を享受することが出来る。中でも陶酔状態・夢遊病もしくは「磁気睡眠」による夢遊病状態、精神上の疾患にあっては、その最高の歓喜状態において神経節系統の活動が昂揚され、魂の高次の能力が示される。「精神病者や死にかかっている者は、時折、自分の外で肉体を持ったかのような別個の自我を見る。皮膚の神経の抹消から立ち昇る模糊とした物体、そこから浮遊する魂は現世の宿としての肉体と同じように、仮の宿を造るのである。」²⁶⁾「夢遊病者たちは、いっそう高度な認識、他人の思考を理解したり、遠隔の物事や自分もしくは他人の未来なり過去なりを予言的に見透したり、近い遠いにかかわらず物体界を明晰に展望したり、自分の内部の力の策動を洞察したりすることを心窩を通して、すなわち神経節系統を媒介にして受け

入れる。』²⁷⁾すなわち、霊の感応力やそのさながら魔術とも思えるような、単に機械的な接触の法則からはとても説明しきれない自然作用の全領域が出現するのである。

シューバートは神経学や生殖に関する医学理論、ガリヴァーニ電気・フロギストンなど当時の先端的科学知識を総動員する形でドイツ観念論哲学とメスメリズムを融合させ、「世界靈魂」の思想へと収斂させていった。彼の思想の後世の影響は未だ精査されてはいないけれども、多大なものがある。前述した「世界靈魂」の別称「生物のあらゆる種に本能的に植えつけられた密かな記憶」は、直接、ショーペンハウアーの「自然における盲目の意志」に受け継がれているように思われる。夢に関するシューバートの洞察は100年の時をおいて再びフロイト、ユングの精神分析研究の中にその痕跡を残している²⁸⁾。

3. 結 語

本論考は、プラトンらギリシアの思想家に発し、プロティノスによって完成せられた「世界靈魂」の思想を、ルネサンス期及び18世紀後半から19世紀に至る近代科学主義の時代における再発見の歴史の跡をたどりながら、その変容の姿を概観した。ルネサンス期の特徴は、なんとと言っても錬金術の知見の応用にあった。一方、近代の特徴は科学主義にあった。しかし、双方ともその神秘主義という見まごうことのない出自のため、時代の学問の嫡子とはなり得なかった。それどころか、近代の場合、メスメリズムの剣を片手にし、最新の科学知識の衣を纏った「世界靈魂」の思想は多くの者にとって見るに耐えぬ異形の輩としてしか映らなかつたことだろう。

「世界靈魂」の思想は科学主義の時代にあつてヨーロッパ人、特にドイツ人の想像力をとつともなく喚起した。本論考で扱った以外にも多くの学者・文人がこの饗宴に加わつた。「Od 説」のライヒェンバッハ (Carl Reichenbach, 1788-1869)²⁹⁾、ラ・ポールと生殖行為の類似性を指摘しクリンガー、母体と

胎児との関係を磁気説で説明したF・フェーフエラント、神経学のライル (Johann Christian Reil 1759-1813)、フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) よりも半世紀早く無意識と意識の理論を展開させたカールス (Carl Gustav Carus, 1789-1869) とハルトマン、科学の時代に両性具有論を展開したフリース (Wilhelm Fließ, 1858-1928)、「e s 理論」(*Das Buch vom Es*)のグローデック (Georg Groddeck, 1866-1934)³⁰⁾、生物界に息づく「死の本能」を洞察したショウベンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860)、植物界に靈性を認めた物理学者フェヒナー (Gustav Theodor Fechner, 1801-1887) など、直接、間接に精神分析理論の基礎づくりに貢献した者たちが多い。「世界靈魂」とメスメリズムに心を奪われたのは哲学者や科学者だけではない。「動物磁気」を扱ったバルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) の『ルイ・ランベール』(*Louis Lambert*, 1832)、二重人格を扱ったホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822) の『悪魔の靈液』(*Die Elixiere des Teufels*, 1815)、O・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の『ドリアングレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*, 1891)、多重人格・催眠術を扱ったモーパッサン (Henri René Albert Guy de Maupassant, 1850-1893) の『ル・オルラ』(*Le Horla*, 1887)、R・シャウカル (Richard von Schaukal, 1874-1942) の『エロス・タナトス』(*Eros Tanatos*, 1906)、ステイーブンソン (Robert Louis Stevenson, 1850-1894) の『ジキル博士とハイド氏の不思議な事件』(*The Strange Case of Dr. Tekyll and Mr. Hyde*, 1886) など、これら興味の尽きない作品群の全てを挙げるのは難しい。

注

- 1) プラトン『ティマイオス』種山恭子訳 岩波書店「プラトン全集12」所収、1975年、40ページ。
- 2) 同上書58ページ参照。
- 3) プロティノス『魂の本質について』田中美知太郎他訳 中央公論「プロティノス全集第三巻」所収、1987年、63、69、298、299ページ参照。
- 4) 同上書43、47、69ページ参照。

- 5) 野田又夫『ルネサンスの思想家たち』岩波新書、1979年、39-42ページ。及び、ニコラウス・クザーヌス『信仰の平和』八巻和彦訳 上智大学中世思想研究所「中世思想原典集成17 中世末期の神秘思想」所収、1992年、105.106ページ参照。
- 6) 野田前掲書、136、137ページ。
- 7) 加藤守通「ジオルダーノ・ブルーノ」、『イタリア・ルネサンスの靈魂論』三元社、1995年、182-198ページ。及び、野田前掲書、189、190ページ参照。
- 8) ヤーコブ・ペーメ『神智学の六つのポイント』園田坦他訳 創文社「ドイツ神秘主義叢書9 [ペーメ小論集]」所収、1994年、226-229ページ。
- 9) C・ジルクリスト『錬金術』桃井緑美子訳、河出書房新社、1996年、59ページ参照。
- 10) アンリ・エレンベルガー『無意識の発見 上』木村敏・中井久夫訳、弘文堂、1980、71ページ。
- 11) 同上書 81-86ページ参照。
- 12) 同上書 94ページ
- 13) Baader, Franz Xavier : *Sämmtliche Werke*. Vierter Band. Hrsg. von Franz Hoffmann. Verlag von Herrmann Bethmann. Leipzig 1853, S.47.
- 14) エレンベルガー前掲書、90ページ。
- 15) Schelling, Friedrich Wilhelm Josepf : *Schellings Werke*. Erster Hauptband. Hrsg. von Manfred Schröter. C.H.Beck und R.Oldenbourg Verlag. München 1927, S.437.
- 16) Schelling : ebda. S.445.
- 17) Schelling : ebda. S.548.
- 18) Schelling : ebda. S.549.
- 19) Schelling : ebda.
- 20) アリストテレス『デ・アニマ』高田三郎他訳 河出書房新社「世界の大思想 2」所収、1969年、298-301ページ。
- 21) Schubert, Gotthilf Heinrich : *Geschichte der Seele*. Erster Band. Hrsg. von Anton Heine. Georg Olms Verlagsbuchhandlung. Hildesheim 1961, S.100.
- 22) Schubert : ebda. S.101.
- 23) Schubert, Gotthilf Heinrich : *Die Symbolik des Traumes*. Der neue Leseinstitut von C.F. Kunz. 1814, S.106
- 24) Schubert : ebda. S.100. 訳出にあたっては [G.H.シューバート『夢の象徴学』深田甫訳 青銅社版「ドイツ・ロマン派叢書」所収、1976] を参考にした。
- 25) Schubert : ebda. S.101f.
- 26) Schubert : *Geschichte der Seele*, S.258
- 27) Schubert : *Die Symbolik des Traumes*, S.151
- 28) エレンベルガー前掲書、243-245ページ参照。
- 29) 「磁気催眠」の実験にあたって催眠術師から被術者へと脳波が移行するという説。
- 30) グローデックの用いた術語「エス (es)」は非個人的で攻撃的・殺人的衝動に満ちたものであり、その衝動の各々には隠れた反面がある。グローデックは、「エス」が生理的過程の形をとって病気の原因となりうることを主張した。この術語はフロイトに受け継がれた。エレンベルガー前掲書下巻、499ページ参照。